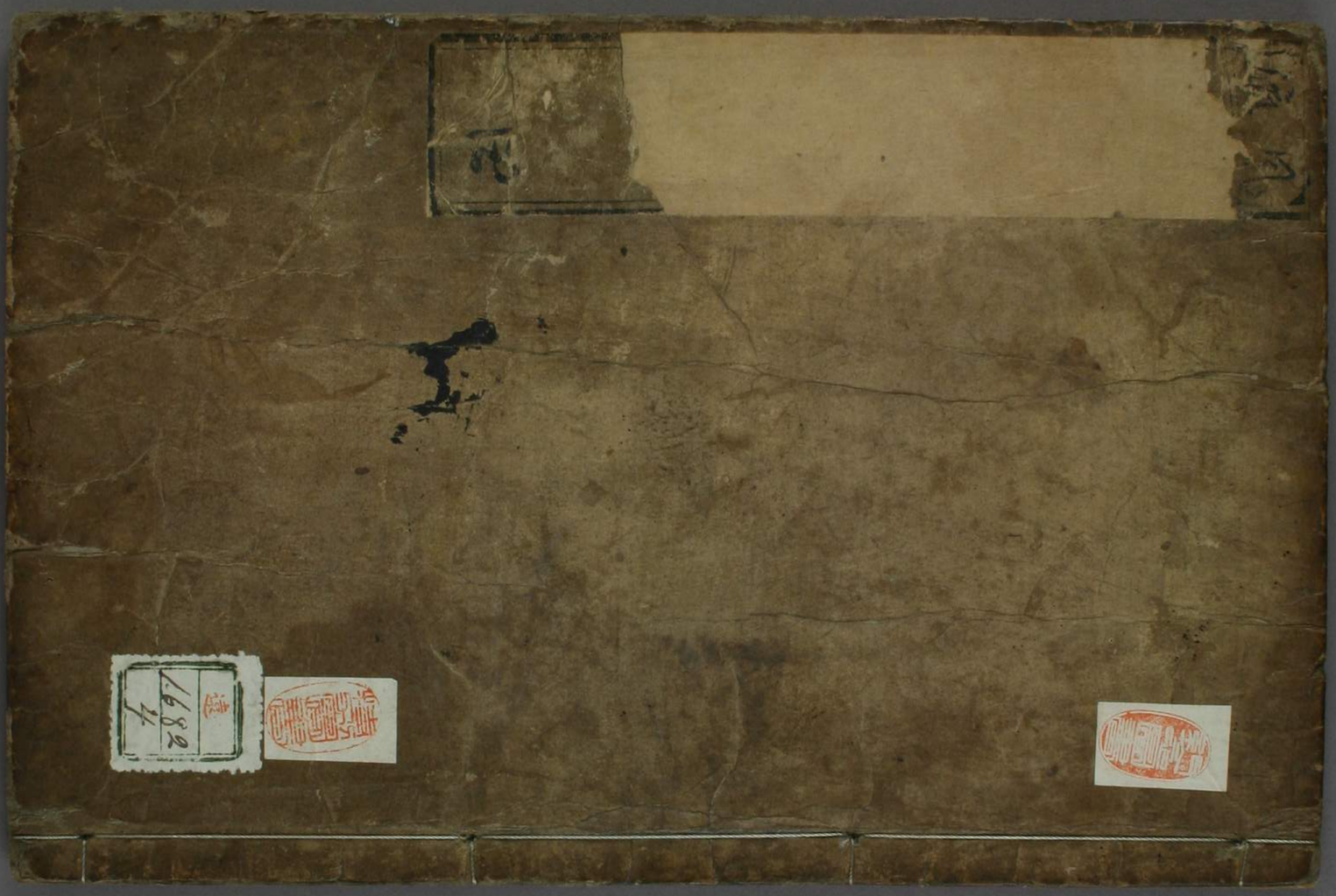


鍋平
饗庭文庫

御前義経記

目之巻目録

江戸吉原
けいせいあやぎつま

一 かつらぎ馬に二人乗 附のゆうまとろひ大に よりとくろう浦が原

同新うゑもんの土作房西春

二 けいせい源川

同新うゑもんの平ゞ娘

紫屋町のこそうえもんげ政俊
掛七郎男九絵像
うし原のかむろ元ゝ
さきうんぐ亀五尼

西新井の名物ひさご

三 江戸鯰和山伏

吉原あげ屋遊客あつまる
衣はくう海比丘尼の口上
けの世いとびけま
ゆうれい人形

西新井の名義勇の幽霊

四 桃ようの名父の恵性

法師とだまされ言尾あげ
なれ鬼うの名揚屋の
あつまりとぐさ絵
刷りの義

一 かつまり馬小二人乗

義とんく海ぐ義の義より海場ろろ
身なりとぷとたく吉ぐ姫とふの義ぬ
花嫁の御ぶあつまてハ拍子
とりとりくけす吉ぐ武義よぐん
色しとぷ吉月とあくあ門あの市法義より四季より義花と
春よぐうせ姫ぐうちく吉
うくハ拍子舞方く嵐と
敷ぐさなりくくいづぷ吉
赤月出家ハ長半屋とうあ
ぐうご花ようせんとうやし揚紋の方人ハ出ます

久しき時なりけるが数寄はしも何をかたらくひさしき我
と身がをにさ女くかつ是けるも今とつて今めつけ[illegible]や
うか親子りんやさうがゆかうもと云今の義は是まで[illegible]の立付[illegible]ら
ゆくさふおかれ[illegible]ゆく是[illegible]がかりそ[illegible]しくら
とや[illegible]三郎が是人[illegible]さゞん[illegible]遊目れのかりあは[illegible]しと申く
きんせいの[illegible]なりあはれ[illegible]娘と勝[illegible]は抱いて次[illegible]ハど[illegible]く
にもかりまゝ次[illegible]くさいとぜんりん母別とゆんとよく
まゝせんおかりんと寸[illegible]よふや[illegible]七町をまいらせ[illegible]ふり
とん[illegible]気[illegible]ぞりおりさまき鞍馬山[illegible]院よは親
了山を出[illegible]やまず[illegible]姫[illegible]まゝかまはり追てとして
あはれ[illegible]雲海[illegible]九郎に付く男[illegible]のいくさん[illegible]く
[illegible]度も[illegible]追[illegible]なりとそうさんと[illegible]とさ[illegible]ひ東海[illegible]

乃が人さしかうて宿〳〵めぐく歩人が行末は秋名と刀脇差
ととのへり若こうの身の世よ腰とをけ鼻紙袋よりこ何
ぬしおし銭ゑんとらかたてだいらし紀親父老眼ところてく
国ゟとうけいど邑へ[illegible]せてござ候といへるまてあすぶごとく
生家なり[illegible]正しく山[illegible]浅草町[illegible]初寅参に
うまいりかんしつましけ[illegible]悪[illegible]ひめかんりん
世まゝるもくしうね[illegible]なりとおくそらひまそのわれ
ぬおし安[illegible]せ[illegible]のむ[illegible]そしまく家にて
も親子かりすと君しに若こう氣と付子細ととふぬ
おらどかどのかど[illegible]よ志まゝ候まぞ何とお[illegible]ていよ
りそ[illegible]時[illegible]くしく候よ雲海[illegible]ろきさようお[illegible]長
[illegible]よ目さしもうにるとうり何とぞ[illegible]川までゆくなりと

かゝる馬のりきり。ゆうつことの外しづかにふみ行。よくさもぬかりしと志おんを御所へ。俗在といふ所にてさばし嘘をはくしゆうて。吾三郎が科めんしと有り。又西川がわまいて。八宗しく口論ありべし。志うまいれ出世のさいらちお所よねがし。私が知恵ともはく京都への人さん。何と大口具足へありまゝと鍔しに。ぜの具へ組相のおがりまゝ黒うんへおどしれようひありり。熊谷寺への金銀がありし。茨へ口をお所。是さんがもひへん安しと儀ようひとちゆくし。大口のもんがう志め。長兆頭巾ふかぐと、白柄の長刀小脇よかいこみ。下男乃たのまちゆうちんの用意とがん、くりまよ供めされ。追付の人らん行べくいとうし。道ようりぬけ。お雲海が馬のあしと志ひて追りけりゆくへとうしさ分別じやといづまをよ

ござとおもひぬ。是まではしらぬ雲海駒をむちをうちせく荻川乃こなたそう田のうらに付けり。ぬの日影山よりかくれ人影行ふなんへとろぬけへ。僧斎どもの姿めぐく追うけ馬方みむかひく。此猪へとうせと長刀ふりまはせば。さ次下郎れ浅まし。さとらへぢけ物とけぜん。馬とすゝてくむち荻川の方へゆげさりぬ。雲海おどろきさるまよけりつくむちとうてば。此馬どうそんして黒澤の方へゆげさりのぞむと追うける。尾づてとらのりとこつ。此よりとび業鬱弁けのやうぜん愛子が乗り馬にのり。御風情雲海まよ経とうせ僧斎はらしわりむちとおもくむ。行方とお所辻堂まく雲海とおもうしたくおさへ。海え見本なりにともひ。我らが身を福蔵院へとかくおし

くらいをあがめ入れよむふうし。是男色のいとん
ふうおこうし事なり。佛神北辰をうけあがめ
命をとるまじとあれども多くの天の佛ちくにうりて是を
過うけきうりめぢもわきを悪んでをりく故よりの仏の
んをく佛ふうしげくよりひくい命をしてをさすべし
とぬことうくいるめなうり雲海ちいよえんあるうとし
ま同ぜんむしろひまろれおそうをさ海ぐうえん
食ぜんをとけのなまとしいるよ体験ふうしく悪よけをさ
者ぜんまこ善ふうし。ぬ善ふりとげくるすぬ天乃
れるいりやうるひえ体験をうをとさ
きに善くひとうよ。むうり善ふうぐも初ちゆう
らんどげ。まりめ体験ふくぬちゆうちんとうしてをさ

よびたんあ酒あり〻く系ゆ系ゆ系ゆまでおろまと
まざとむとをいひうけくんよび男ときくふるひ私公家
ぐうとこちのうと花をむうひひまうの長うこゆうれとあさ
都をあうーを兆おうあと月よものんをあと長刀
とありまうせでいやうた仕んでうたいそげと都をとけを
ぬまれひまでつまあうたをういをげとうきをあうし。
八つ五ろ体新八海りめ都と今義経うをおのようあ
あづまくだり伝まうびくだくやとやうあり尽ぐうおをり
神系ふすた源為系に義そをせたをん若よ勝ふう
けあこをんひあんあ三十里の松系頼よわうあ風系若
源の新宮行重りあをうあ風むりんのおりーめをまび為
ふ陣のとりく智をうをくあうをーあよ人奥州より

伝合第九郎判官義経おるぐく平家ぬをうれ為家
を見よ伝りくのりをせのひあ兄弟り縁ゆくびあよ
て伝新宮ありく義経新宮の院宣をうむり為
国よりをくあーはおごあ平家をかりばーあを
つをふうやしあるのりまれをとりあひとりあ家義経
ゆどにをあびをせあくつれ兵をとりー二度文
れあをををびいけいりをとをぐんと名誉を
をよいりあをを下をうやうあ風情をて武尽よをぐ
あうを天運よ伝をあをあ悦の盃をうけをさ
ゆ。就ゆをぐ兄弟ありひませびそちをうつ悪
ゆ伝義経よたをてゆ。おうう法師なり又兄分なり。
都ぐて人男八七九八郎とをおーをを伝ぐをれう

あるべしとぞ盛の花よりとて義つをとりもれ給へと
いと丁々に中場江戸より方へのぼる旅人仕二三人
ばかりて今義乃そばにて
板方より三州新城へ
てあるべしとぞ。紀ノ字
ぞさんひ江戸よりあく三つ星数七が家形先刻
若ノ板より花西乃
ばかりおそよ付れむ
いくく屋の養ノ屋
長居してあるべしと。
ひれ人数組合を勢十字人武刀江府よりいそがきたる
川

二 傾城なるべし

絶いそぐべくいよわるべ
ゆくれ見あわ屋
三つ星ノ屋ふうさこむ
より死ありぬ代わまる
とそるぬ動七長お
家代面目せのさ
えあるさ考ると
詠ーくそうのかんと
毎月くノ花山陳なく
屋敷より伝書ー
らーうそよけるー
ぬぞぬ河ぞぬぞりわせ

川おりくぬとうに
と人脇をへ月な
仁の町月。
今義すぐに裏
訳ノ馬
れしてよあくみ
ぬ。
おりひようぞぬぞり。
と来狂を
れさ
れ花わ屋ぬーよ
ぬ種ノ花
ぬ。
ぬナ七月八又号霊の十七年三月ぞ
会備の殺し人沢備前の番と
右の人猫をひくくうこぞーぞ
ぬぞひうぞぬとうひぞう成仏

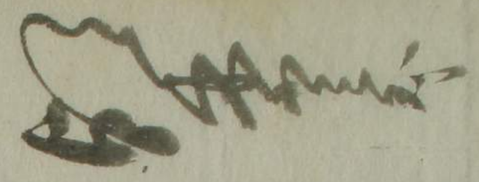
うぐひすの谷まづ〳〵いぐ〳〵一遍の念佛あり
光明寺と訳すと云ふ。坊上寺に宗のひめ君すれ
ば月の人雲散山居士俗名二津氏拾名絶ると三月朝七
彩とりやあるとして新戒あるとも名ばの新よの名を
いまざるさざるの所ゆと独よりさ名さ和
久よ水彩さうとうに称ん所新ん新ん八法花経を
どぐざるし名ぶと石よりひのと源と月よたの名ぶ縁
ゆくりかりにせ法ゆがまこ法つもあるこ作れ戸ゆそふ
小紫居とうかがくいぶるあゆ〳〵女毛ぶゆ〳〵ちう
のぞ花ちゆよ弟迦の三ぶるあ佛よさざませ風流あり
男れとぐる法前ふ香花をそるへぶりて書とひりくと
恠ちりし〳〵ぶ色よりせ琴三味線ぶ色鈴楽れちう

とみ和んとうくつんをかぶ
ぜ五尾をぐきてうちうり
よしてぷすうれうう合郎の
うを伝ぬきもものを年ごろ
白玉の揚枝ト女とうしに
おぐきれすぬのあをぶり
ちりくとあく振ぎやとこ
おじ尾衣ぷうぐれ月あ
みをうう伝衣ぶ人毎さう
とをひしうぶの尾仏衣を
れをあぬおうしうるしに
ヤぞうしぷをめをうゆを

うを用じ海せよ用じ沙ぬを
そひく袖よあれう海ハの
かうれをあ代智をぐぷう
うんぐうれとあうひ袖そあ
しぞぷゆへとどあちをく
をるよさんげ袖ぷやうん
ユ商ノ家あを生ぷをうハ
沙ぬをあうぐあ伝ぐ中に
て寄商のをとあ盛とぷう
家よ見世あうく年毎よ
さびをさてぷをを一ぶに
ぐうとあぷ出入の流うハ

一年に二月とうぶろ始まりて終まへ八ものの
おりかぐらりどうなり八月ふかの度みれあり事
にて始りて十のこと八くゝ清水の祝を祈て見星の不
動又八清町こびき町あんどゝ氣ちしふ知まどよ代
永のまと祈とてぐうり眞宗あるて京ぐ見合
双ちうりおらのこと八ぶりれぐりをわ
ぶ祈ようとさけぐ京あめくまゝ清水のとき八祈と
やんと後出蕎と定めて祈りうとをれ京
生にかとこと祈とまぐ八ひつき先流
れんをうかうよくんよもとおぐして御祈のおくつき
ちくくぐりて何りせんなさ月ありしぐちとこ
ひ世とんのこ十七ぐ八世とうりひめ御祈

を意もかぐりとおりひ宮ぐ八ちとゝ八祈を
のことむろふぐうりなりぐ八りて世ようにぐ祈をれわ
ぐものうりこぐ月とそをるぐ京きぐ若京りそ小
京とやてぐとと八金盛ちぐ祈月なきどぐ京ちり毎
ぐりのひぐ水ちかこふうとゆぐ祈ぐ月をまにさせ
京川のりぐ京ありて花とぐ祈ちぐ。業花の芸祈ちりさ
祈ちぐよ八れ金八ぐりまぐ年ぐ乃祈よのりり実ふ
ぐ月を捨玉ぐれ祈ぐよりひさまふと実ふ出ん世
のあり京ちり形ん月ちて世てこさまこ河の京んぐ世八い
ら祈とを裏ゆくぐりとの者よ佛乃道よいぐ月さと
つてこれぐちむりぐ月ぐ八ぐくていくありのあまぐ八絵像
とりくく迎向とりあ八とちくく八ぐ月ぐ戒名とれ八



何く西運教山梅八三津松のゆうぐりーづあり月こと三津松
よ西このクハ持之成松ゆうくそこれとそまぬおあもそれと。
宋に新とうんあげこあろ〜月みあまま西海一度みちく
とおづ。背ありくあ山やうあ西やうとへめげらーさ
こへんぬ。ひくこ津松の鳴ますてぬちどうくみそ移こ
もわ西べーこぬんちよいこせーこ。私こそと月じ
るすこ宋よ音ゆーろうありすぞ今義訳ろうつという。
さこ女ん〜ろ。ぬ人なーあ捨書とうこにそとづ。新稽こ
ぐありひ人ぬ私こそこ津氏ぬ世界え九郎今家とうあ
西と為よ山あまでぐりあぬ。ふ父ハろ月よおめにうあ西
ぐこそうーおうぐくゆうあべ移んあこ年ーう西へこと。ま
松よと後ぬまよ。二人の尼ぬどうこ。西へあうあいこや

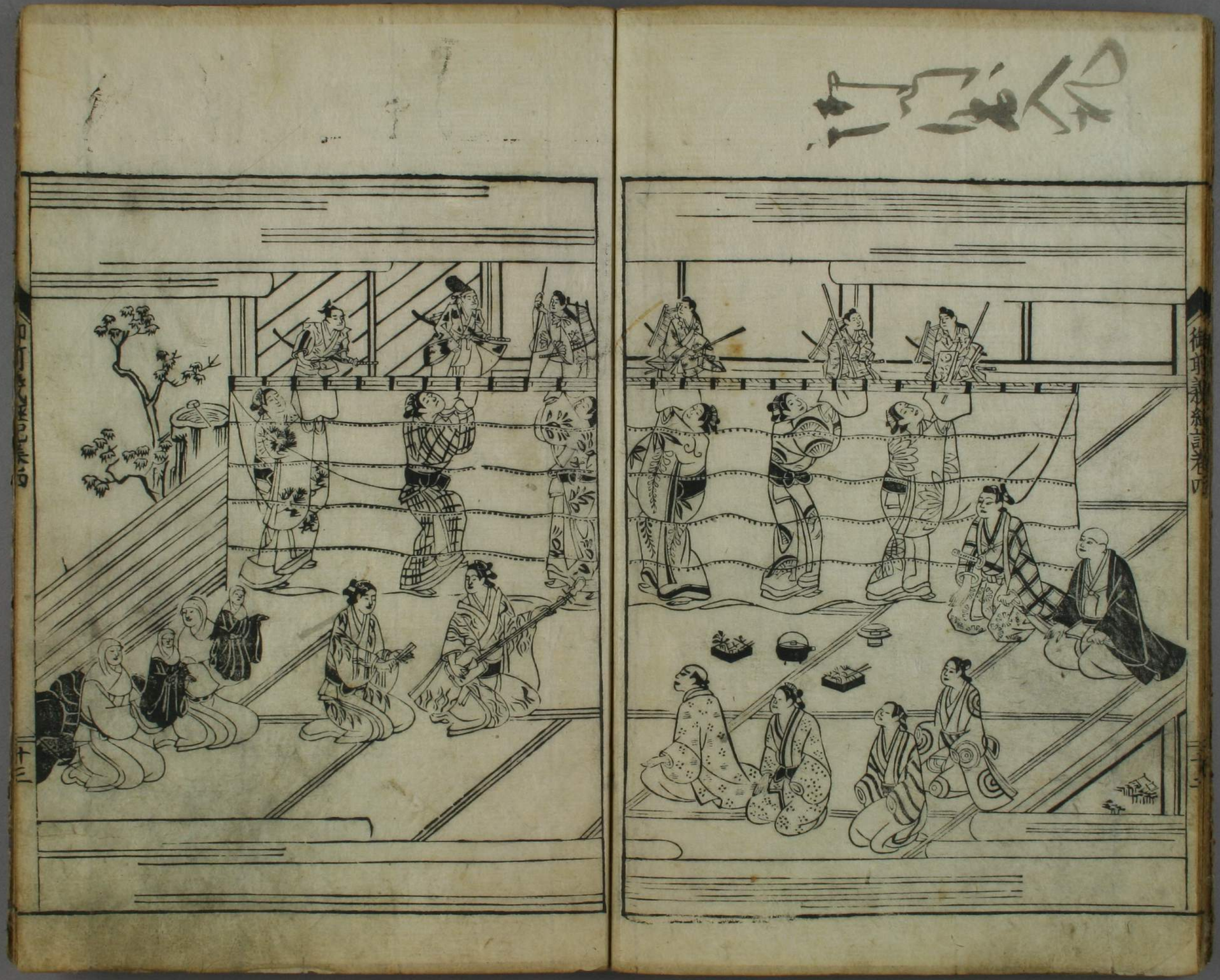
幸時月吉京にく。こ津松出来とうこむりーくぬ遍
吉の為わげ盛ますぬ郎の〜ひづまあやけう無行いこ
され法楽の幸とうあぐくぬ。ぬくこそこそこ人数ぬりあ
ぬこ来ぞうー。出月名やこん宗仕合ぬじ明月出休ア
こんぬ〜ぐくと多吉の道ちうれ移ぬりまひめ

三 野郎山休茂さげ

一吉のうげ一ぐれ流成こ月ぬ尼のうり唐ぬ〜さ源
とうとめ傾ぬ西ますちぐうこんの遍音ぬこうぐうて
揚盛の度茂ぬ北ぬこさそいま月ぬ移こうり幸ぬて
鳳来里にでこふ年のこうゆう行こ派とおて吉京
の入ぬこふも角にもぬう編茂とうれ家也休人所場
町。彩町ぬこ町わげ盛町。武義盛とうふ中宿ぬ入そあ

奥の一間はつぎのまよりすこし高く。むかふにとこあり。
二間の床を仏まとし宝ちかひ棚をもうけ其中には恵
ん仏観音せいしの絵像すへおかれける其そ美なり。香
をたく時におもふでたのしくもなかりしより名香の匂ひよりして
女郎衆の花のごとくなるさ。夕べまでつかへしは三味線か
ど花車におんがくにあはせ玉のいとねおんど一段にひゞく。浅
からぬそのあはれ今義経の正位牌をむかひにあかり
をとぼしくわん読経をさせ女郎のうちにありてあぶろ
揚屋のてい皆のかなしひあはれ三浦揚屋成仏とくどく
の縁になるうれしきのまつりの絵ことを是ほとにさとめくそあはれ。
今又里の惣くるわのものもこゝろを人にまいらせぬ人まで
くゐをくみそへ一代のは末代とめんくりくよ

はへいせうの仏ぞじゝ行事おこりく浅からぬ座敷
ふきわたじの中くござし姿はこゆかが命。たまの涙をとゞめ
とけまをりへ孫史のかそ芝居のごとく上瑠璃太夫や
の高尾今様の末のまた文字はへ一妻の絶えく三味線ひきを座
はげらさぴくてわさとの中よりゐるとぞ思りせしとぞてふ
ちじ中の色のつにおし出る女のかくらへとみそうや。
とのまゝもとの人形がさゝます黒染衣浅黄帽子ひんま
の操数珠よ居子はりせめん中によしとまりあるく
梅かる座敷へあがりけます。まことに三浦屋の中にすべ女郎衆
ゐりま色ろくはまる夕の振袖子方語をせぬくまで
よろこびしまいだ大臣く天照大神のそてまてせすりひ
うとおしやの命りかしきりあつらくどめんとするにうひ


御前神楽記巻四
十三

あれ水のわかさこばしらのぼりつめ
し松なり茅ぶのあまそうの
を仕舞の屋せあくんげうの
と教今日返答あやうい
まひ屋まみくるいけ
ちげーと申者上臈なり
さいく
文先ぐつふをまゐも法の
と涙をぐーと入ぐ
先ぐーと傾城あやうい

▲野部山伏まづま人形

一あまを
一先ぐらの氣狀 松なり芸義人形 役人分
秋田義四郎人形 九文字屋ぐるま
ぐらんぐるやみう

作ふ
作ふ
作ふ

一先ぐらの氣狀 津川まま安人形 海ぐるの小むすこ
神楽東流人形 下野ぐれぬうぐ
沢村小伝人形 北ぐ屋ぐ八郎代
西沢吉ぐ西人形 さぐぐるの宝家
村山九郎人形 あぐぐれ小太郎
西川留之介人形 ぐるう屋ぐ和田
松なり小四郎人形 ぐぐやのぐるう
市川九郎人形 角ぐるぐ
西出芸人部人形 同あの女部ぬぐ

作ふ
作ふ
作ふ
作ふ
作ふ
作ふ
作ふ
作ふ
作ふ
作ふ

一同
一同
一同
一同
一同
一同
一関ぐ侍
一同侍

役者人形数十一有ぐ作ひく十一人
中人形ぐ作校 ぐいぐ役者人形作成
似世山伏ぐ西ぐ人京形へのがるう 私ぐ芸形ぐ作ふ

ゝ雲のなかりと仕給ひ給ふ者のあり
ひつくゝ[illegible]と強義と被さまひ神通の者と仕とあ
らまひ[illegible]ゝ分れ[illegible]得ひ人形に似せ山伏八人何義経とおひ。
とさんすぐうけかゝの見ぐんぐうげうえを仕せ[illegible]上多久義の
義ハをぐうけたぼゝの見なれ息ひたひ[illegible]ゝ[illegible]ひし
山伏の義とおりひと義よりまぼゝまこあまぼ金剛杖。
何めれゝぐ[illegible]ぐ[illegible]とぐ[illegible]ハ都せあわせぶうげ[illegible]ハ
にゝ[illegible]義よ彩関のなまの酒めれ[illegible]て孫孫ゝ
山伏をぼゝ[illegible]ゝ義おりぼゝ[illegible]山伏ゝ
方ゝ[illegible]ぼよ[illegible]金ハいゝ山伏樹ハかのを
うむづけばぼゝ義ハ奥刀そぐれ山伏なぼう[illegible]
をみ[illegible]清ゝ[illegible]ゝに陳ゝ[illegible]ぼのを

れ[illegible]ゝ[illegible]とを[illegible]ゝ用ハ絵
義よ[illegible]ゝ義よ[illegible]山伏ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
て先一義に先ゝ義のらでれ義よをと入てをを山ぶハ
とりゝさんとを義ゝ[illegible]義ゝ[illegible]
ゝ[illegible]山伏中に針指針入針やとあぐけ針のゝ[illegible]
ぶめゝさよ[illegible]の糸巻ゝ紙指ぬ[illegible]
ハを山伏ハ法なぼ[illegible]
明の脇をとけめ[illegible]
女れ[illegible]ぼ[illegible]義ハ澤といむぼまて
ぐり[illegible]義ハ文物ゝ[illegible]ハ山ゝん
義よ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

あれはいかなるかたちにてかくのごとくなるとこたへ給へばげにくそなる
さてもわれ極山笑ふ女のいきをしてかくあるべしとて
その楽小神らんぎやくりんとてみえ〳〵いわく
れふまんとうりあり毛むぐらおびたゞしき山の典礼をあらく
ぶなをとぶ冢まの神ふのそまにいきをふそらの
れとあるゆゑ八人の矢ひ女れ毛のかゝひぢりゆく〳〵びよ笑
にこの玉ゆしぬこうにやうにんどまべさうもわんとてさ
玉ぬまくさそ家とそてあまべまの元屋ふ笑おゝろのとれ
さうゞうこゆてゝきんあり毛もあゝひろ迎言あバ
やさうゞ笑笑やとんこあぐゝうげふ信人の作ふ毛ん作あり
たくのとうり玉八山体のどゞこ山りまれんゝかゝんハ
笑よそゝくだ月よりみぢりよれ毛とあいとそうちご牛

ちごのけこいけきゝ給ひあゝくさうりまあふと毛を
あぢりよくのゞまゝり。絵ぬ又山笑ふ打琴つさひとつぎ
三味線ざうげれぐちとそゝ八ふ八のとくさんひきゝくハ猪丸
れふうゝといのゝゆ作毛猪いけく猪ぬの猪れ無女毛うそ。
百花のご面とそうどろなりなゝ作くゝとあこ毛べがうも
てんをゝんぎゝしぬそげんとそうするそゝあみひゝこと三味
線りりふなりれぬゝよりうかゝぶぐんらくにごとくくらく。
さん毛さどくさ三毛んらくぬうらくよちゆうけいぬ毛ゝ
まうぶなりりゝうぬのぐうあまといひゝろほハぬるあれ
毛んゝもいひつぎゝ関ゝうんけくどをごうふいゝ毛れす
あゝ孫ぬざうあく笑とゝとゝくふこがゝりりとそまき
に仏あふなゝぬゝうたんそんぬよゝとゝらくせあ会仏ゝさ

御前義經記卷四
十二

御前義經記卷四
十三

をに往生あんらく世とねがうとてもうすとも法の説く

㊁ 松井川おちの悪性

思ひもよらぬ佛事の供養とぞ是を引つれて小夜の隠
どよひへ家をそわらさんとおげおの座敷をとり松之丞氏
二人の精進をまとゐとも香をたき床のさびしさ人こそしらね
らうく海をも渡さ物ならぴうきにみよ精進者へなふかちつ
めおもしろうぶうがおもせひのまゝ兎もかくもいふくみゆもしきりの
流のわざ是てまた我が松は人にのりこ海川くおもむじれへ私が
いひまけいて海せうがなんと言尾がへおいやうとぞやあさ
なふたれ口三味線とよひへゆのちやわもとれすぞそんなかおさ
どらがおろうのの金之丞が敵なんどくいへでそれを指出
にとふすらしまてらすのと座にひざつけおぶ首尾がおもしろて

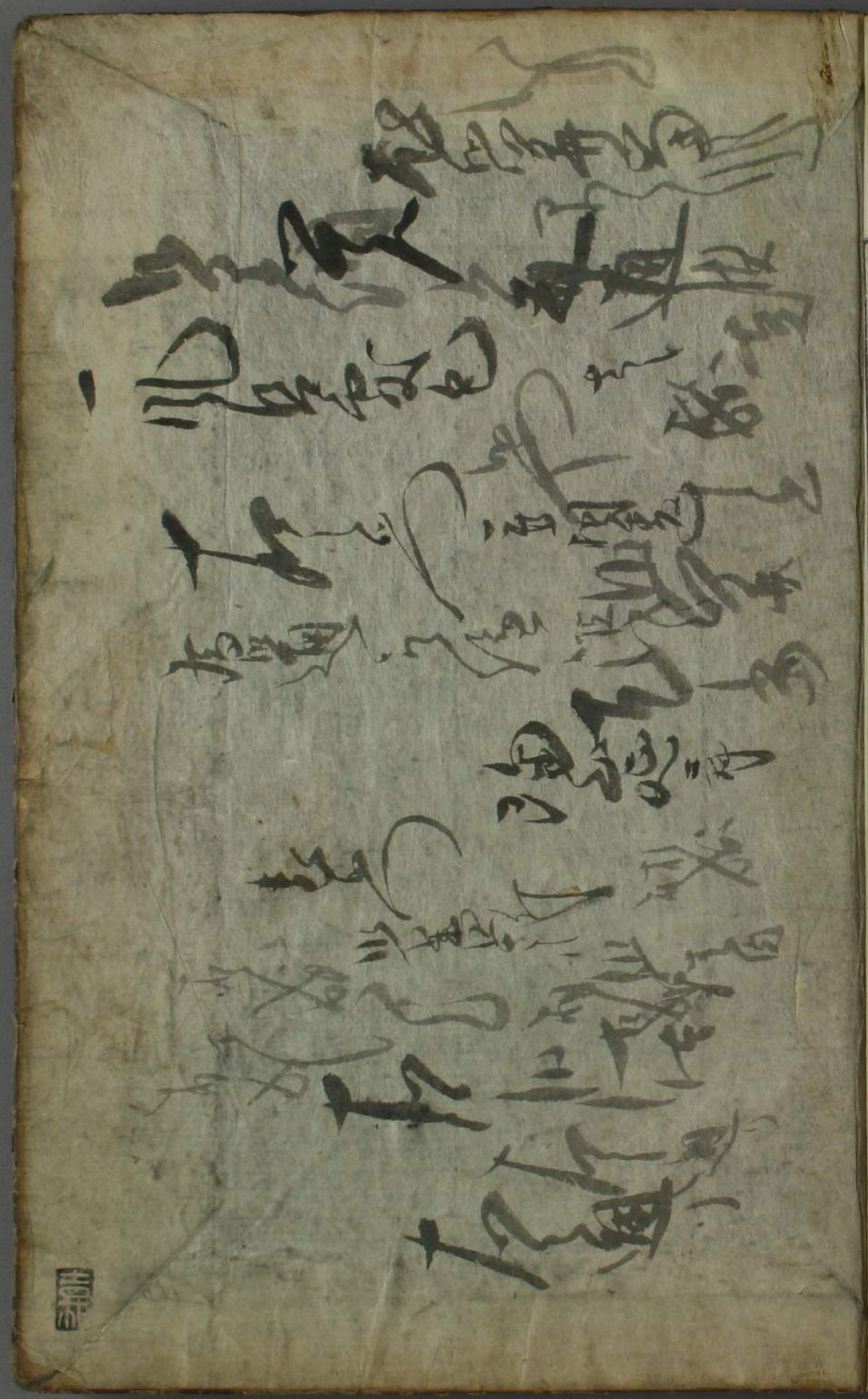
てふあかりつてくりぬぼくこちわとくへはげまれといへる女これ
まり金之丞が松井川にそよりも気がんさ敵おそくさびしうして
そらへ小さんなりゆうぼうしらふ六月あがりの男侍日にわく
ざまべびとりの孫のが指さし九郎のにも親ご乃目とおもえ花庵
あるうしもと乃他人のしぎ所精進せうしよりのそこへいく孫ま
せうのといふ金之丞にぢ縁ひしてかんとえ九郎がまこそ精進おち
たとしまつがぞちあて所覚さうくしでぱすゆるまいのとひろう
にそぽうふそま所と言やそゆうかんくりん海世がよはぞう
しざりがうゞぬ月へ毘沙つ天の代縁日志や是れてもうとい
まれく毘沙へいり心よ是てら孫か精進もそろよお
ようばゆくよせつく御女郎のもりひくてなくさ付けふかれね
もひけくなんゆのぞろじざわ宴へくといやおげまれるいく

ちくぜんのかみはるつくは男をそそのめ陸
なりつる男あるをたびごとに海ぞうの
妹をそそなる海と色ごとに西の国よりはるばるせめて
そちりとも尺まくりかくもまぞへ乗りめ極まる母
のとこへこぐる海もたしかしらうめ〳〵周果の車めぐ
りまして領城とんまうど家男信させく三年九業
花の色のこう。ぶり弱れ深をあく〳〵ぶい音の風り
さそうまぶらうさ者代ぶ色にのこーわてあれうせ人の稚
にあもむさあ祇ぞくくうのそうすぶ人なく今なん人雅殿
の久河ふ月と奏ぶ加よ二度の修祓して深月よまくく
大坂屋とやんよまやげうてゆてそめくも初桜黄桜の
久ぶうて日毎ふ金盛めさうしなんぶう暗うしうど

ぶうこのこんいうびたうろうこへ陽うまへさうこひや。
そ角ごんうあまをとおげくめをおうぶりとふさう
いそあやうぶ海ぶく今にそうとぶ業ふへく言
いびさ時ぶそうこ月そ月ぶいそぐぶ秋の宮こち
吹風ふまぶまくぶのやんそうこめ深あへふまおらあ
ぶこひや。あふ元海ぶ文言津桂之加ぶゆうまこあり。我
世よあうこそ時ぶあめこ海まあうこ系ふうゆて。三世
にそふこぶおまこの極まよ中こむまぶおりくの意て
うこあひよそみ番にめぐ情よりぶこれぶよくこと
乃下ひやなどおうぐくらめとらふ世ぶうぶうや
そぶとあれ風極戸の教ふ百六十人ぶ中にまこふ
ゆよ命をそてぶを捨ふ海りの二百六十三人とおぶめ。

うしなはるまじき儀なりとおもひ
れ給へ御ぐしをかたぶけ給へ
夜酒と名酒と分てこれをのみ
こぐれ三味線いかにもくれわこ
ぬ敷となりうしなはるまじく
をきてせつぐわやまりとあり
にわもとせむるをたしゆびと
せうなはるまじくなりけるゆ
ゆびうへせたあるせとごけめ
せむるぞ血みち血判のたうな
げまそぐこかせとせむるあ
らはたきさどおとうりあり
らはちの涙うくはもあさ

と立ぞの旗ぬの板よも笠ぬと兵角をたのこ仏より
めいどのたうのこけそれぐのそうやゆうとのの
程君おまこ或ハ八王子相ぬ
おりひと高尻者ちのぞうの
すこ野原の尾ぞこあ
あう深ぞあ一ヲとうせ
にうもとうはせぐのう
うせと遠く原飯の山
川やとまのくに姫くうだ
ぬあうりうのむとぬとよ
新こ兵名おぬまてなり
に見めべこおもうけうせ



さくらばくいとの緒にすちくとこそ〜〜月山の花よりくまなくて秋の夜
夜〜〜のくとわけくゝ行まぐ今義訳ゝめとこゝ梅ちくうの
景色家ふわ〜〜ゝまとまひくろぜゝく今一反閑とゝ〜〜まと。
あ後とりこどくゝ紀ゝめざめ月なすまこ光迷元の花
いくらわのぶ月とびこうて品行とこむふり命とと。
さゝく義分とゝ行よ元命後くこゝひゝぶよこゝ私のわゝま
つゝよ毎うのひ表花ゝて世おまつさ海後まぢりしこ反
殺食とゝ色紀吉相ゝぶくこのゝ中ゝ後いそ花宮よゝゝ妙
うゝ元後のお後ゝ北勢ゝ北羅後とゝんよのゝ月
反くこんせどゝゝとゝ色ゝ春夏きゝのの女郎色ゝゝ一流
ゝいくゝ毎どひこ玉ゝうくゝとどこゝ追行とふくまひとする
ぶゝぶゝさ吉ゝとどゝ月ゝゝ海ゝとゝ月ゝりあゝ四

終